

Validity of the ESSENCE-Q neurodevelopmental screening tool in Japan

日本における ESSENCE-Q 神経発達スクリーニングツールの妥当性について

執筆者

Kahoko Yasumitsu-Lovell, Lucy Thompson, Elisabeth Fernell, Masamitsu Eitoku, Narufumi Suganuma, Christopher Gillberg, and the Japan Environment and Children's Study Group

概要

【目的】

本研究は、神経発達障害の簡易スクリーニング質問票である ESSENCE-Q (Early Symptomatic Syndromes Eliciting Neurodevelopmental Clinical Examinations-Questionnaire) の妥当性を評価することを目的とした。

【方法】

エコチル調査に参加する子ども(77,612人)が2歳半時に、保護者に対し、11項目からなる ESSENCE-Q による質問票調査を実施した。発達障害の診断に関する情報は3歳時に保護者より収集した。ESSENCE-Q の各項目は2値(懸念無:0・有:1)で採点され、ROC解析などを用い、ESSENCE-Q の総得点と各質問項目について、発達障害の診断有・無の2群で比較した。

【結果】

854名(1.1%)の発達障害の診断が報告され、ESSENCE-Q スコア合計のカットオフ値を3以上とした場合、ROC曲線下面積(AUC)は0.91、感度84.9%、特異度84.8%、陽性的中率5.9%、陰性的中率99.8%であった。質問項目別では、コミュニケーションに関する懸念(診断有89.5%・無14.2%)および発達全般に関する懸念(同80.2%・7.4%)について、発達障害の診断の有無によって、有意に異なっていた。ESSENCE-Q の総得点は、日本版 Ages and Stages Questionnaire (ASQ-3)の得点と中程度の負の相関を示した(-0.36、 $p < 0.001$)。

【考察】

2.5歳児の保護者が回答した ESSENCE-Q は、スクリーニングツールとして有用であり、特に高い陰性的中率により、発達障害の疑いのない子どもを除外できるツールであることが示唆された。本研究で低かった陽性的中率については、対象となった子どもの年齢が小さく、まだ発達障害の診断数が少なかったことが主要因と考えられるため、引き続き子どもの発達について追跡調査を行う必要がある。